



写真提供：北村和秀氏

## Contents

新旧プロジェクト長挨拶	P.1-2
公開ワークショップ開催と意見書の提出	P.3-4
沿環連ジョイントシンポジウム	
中島教授、神田教授テレビ出演	P.5
体験講座開催	
学会賞・功労賞受賞	P.6
訃報	

## プロジェクト長挨拶

### 有明海研究の継続に向けて

佐賀大学有明海総合研究プロジェクト  
プロジェクト長 山下 宗利

佐賀県有明海沖では10月18日にノリ養殖の種付け作業が一斉に始まりました。赤や青、緑のノリ網がきれいに並べて張り込まれ、有明海にとって欠かすことのできない風物詩となっています。佐賀県のノリ養殖業はここ6季連続で日本一を記録しています。しかし昨年度は鹿島地区ではノリの不作が生じ、またタイラギをはじめとする二枚貝の不漁が依然として続き、一律に喜べない状況です。今年度の豊漁を心より祈念しています。

瀬口前プロジェクト長の後任として、この10月にプロジェクト長を拝命致しました文化教育学部の下野です。有明海総合研究プロジェクトではコア3（地域文化・経済研究部門）に所属して研究を進めてきました。本プロジェクトは2005年から5年間の期限で始まりましたが、今年度はその最終年度にあたります。しかも残された期間は半年足らずです。その間に佐賀大学有明海総合研究プロジェクトとしての最終のとりまとめを行い、来年度以降の有明海研究にスムーズに移行させる、という重大な責務を担っています。

これまでの有明海総合研究プロジェクトは、三つのコアがそれぞれの得意分野を活かし、協力と連携を保ちつつ研究および社会貢献の両面において成果を生み出してきました。コア1では高精度の有明海における3次元流動・懸濁物シミュレーションモデルの開発、上記モデルをベースにした生態系モデルの開発、有明海奥部の環境モニタリング体制の確立、貧酸素水塊の形成と変動機構の解明などがあげられます。コア2ではビブリオ・バルニフィカス感染症対策を中心に、佐賀県庁健康福祉本部健康増進課を含む佐賀及び福岡県内18の関連医療施設からなる「ビブリオ・バルニフィカス感染症ネットワーク」を構築しました。ネットワーク管内での患者発生状況等について情報の共有化を図りながらリスク患者への啓発を行うことで、患者発生の予防に努めてきました。またコア3では有明海沿岸域における地域住民の生業や伝統的な漁撈活動、これにもとづく環境認識や民俗知等の生活文化の研究

佐賀大学  
有明海総合研究プロジェクト  
事務室  
〒840-8502  
佐賀市本庄町1番地  
電話・FAX: 0952-28-8846  
ariakeinfo@ml.cc.saga-u.ac.jp  
www.ariake.civil.saga-u.ac.jp



を進め、有明海学の構築を目指した取り組みを行ってきました。これらの研究成果や社会貢献はきわめて大きなプロジェクトの成果だと自負できます。

佐賀大学は2008年に「佐賀大学中長期ビジョン（2008～2015）」を策定しました。これは佐賀大学憲章に基づき本学の目指すべき方向性とその方策を示したものであります。「有明海をめぐる環境問題」は、その中で重点領域研究の推進の一つとして取り上げられ、実現に向けての主要な取り組みと位置づけられています。これまでの有明海総合研究プロジェクトは、コア研究者とともに全学的な協力体制で研究と教育を進めてきました。また地域の皆様方のご支援とご協力の下で研究を遂行することができました。「有明海をめぐる環境問題」を今後とも地域課題として中心に据え、有明海の教育と研究を推進していきたいと考えています。

わずか半年間ですが、残された課題を一つでもクリアーできるよう努めていく所存です。今後とも有明海総合研究プロジェクトへのご協力とご支援、ご鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

平成21年10月末日

## プロジェクト長退任にあたって

佐賀大学理事・副学長（前プロジェクト長）

瀬口 昌洋

プロジェクト長在任期間：2009年4月～2009年9月

10月1日、佐賀大学新体制の発足に際しての理事・副学長への就任に伴い、9月30日付で、急遽、有明海総合研究プロジェクト長を退任することになりました。4月1日にプロジェクト長に就任して以来、わずか半年でプロジェクト長の職務から離れることになり、大変心苦しく思っている次第です。荒牧前プロジェクト長からプロジェクト長の職務を引き継ぐ際に、大きな目標として2点すなわちその1つは、5年間のプロジェクト活動の総括を完遂し、その成果を次期有明海研究に繋げること、そしてもう1つは、本プロジェクトと低平地研究センターとの統合・再編を図り、次年度より新たな研究組織を発足させることを掲げていました。しかし、これらの目標に向かって一歩を踏み出した段階で、このような状況に至り、何とも申し訳ない気持ちで一杯です。改めて、この場をお借りし、研究メンバーの皆様方にお詫びを申し上げます。

次期中期目標・中期計画にも掲げられているように、有明海に関する研究は、「佐賀の大学」を標榜する本学にとっては最も重要な研究の一つです。今後とも有明海研究を全学的に取り組み、さらに進展させて行く必要があります。本プロジェクトの実施期間も半年を切りましたが、山下新プロジェクト長の下で、メンバー一丸となってプロジェクトの目標達成に向けてご協力頂きますようお願い申し上げます。私は、今後ともコアメンバーの一員として、残余期間を全うし、研究目標の達成に向けて微力ながら尽力する所存です。どうか、今後とも従前同様に皆様方のご支援を頂きますようお願い申し上げます。

最後に、プロジェクト長の在任期間中に賜りました皆様方のご支援、ご協力に対して、心よりお礼申し上げます。

## ■ 公開ワークショップ開催と意見書の提出 ー 諫早湾開門アセスメント方法書について ー

荒牧軍治（有明海総合研究プロジェクト 特任教授）  
速水祐一（有明海総合研究プロジェクト 准教授）

現在、農林水産省によって、諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境アセスメントが進められていることは、皆さんご存じだと思います。8月4日、九州農政局からこの環境アセスメントの方法書が公表され、9月18日までの期間でこれに関する意見書が募集されました(<http://www.maff.go.jp/kyusyu/press/seltukei/090804.html>)。方法書の公開・縦覧と合わせて、「方法書骨子(素案)に対する意見と農政局の見解」として、4月に公開された方法書骨子(素案)に対して広く一般から募集された意見に関する農政局の対応の説明もなされています。有明海総合研究プロジェクトでは、この方法書について広く議論するため、九州大学工学研究科の小松利光教授、本プロジェクトの荒牧、それに速水の3人がコンバーナーとなり、9月11日に、佐賀大学において「公開ワークショップ『諫早湾開門アセスメント方法書について』」を開催しました。さらに、ワークショップでの議論などを踏まえて意見書を作成し、有明海総合研究プロジェクト名で9月18日に九州農政局に提出しました。提出した意見書は、本プロジェクトのwebページにおいて公開しています(<http://www.ariake.civil.saga-u.ac.jp/download02.html>)。

本環境アセスメントでは、先に今年4月に九州農政局から方法書の骨子(素案)が示され、説明会が実施されると共に意見募集がなされました。これに対して、有明海総合研究プロジェクトでは、有明海の環境に関係した調査研究を行っている研究者・技術者に呼びかけて5月9日に「緊急ワークショップ『諫早湾開門アセスメント方法書素案について』」を実施し、技術的な点を中心に方法書骨子(素案)の内容について議論しました。さらに、プロジェクト名で意見書を

まとめ、5月14日に九州農政局に提出しました。こうした経緯についてはニュースレター11号に掲載されています。9月11日の公開ワークショップは、研究者・技術者に限らず、広く一般市民を含めて本アセスメント方法書について議論しようという目的で開催しました。

ワークショップでは、最初に荒牧が今回のアセスメントおよび方法書の内容について説明し、続いて、方法書および同骨子(素案)に対する佐賀大学の対応について、速水が紹介しました。その後は、進行の場を演壇から下に移し、参加者全体で議論を行いました。平日の開催であったにもかかわらず、一般市民、NPOを含めて約50名の参加があり、活発な議論が行われました。当初は、アセスメント方法書の中身を中心に議論する予定でしたが、実際には、前回のワークショップとは異なり、開門の是非自体に関する議論が中心になりました。これは、一般市民の多くの気持ちを反映したものであり、今回のワークショップは研究者の参加数が前回よりも少なかったことが主な原因であろうと考えています。もっとも、一般市民の方からは、「なぜシミュレーションが必要なのか?」、「アセスメントのシステムの中自体に、もっと地元市民の声が反映されるような制度が含まれるべきだ」といった、研究者だけではなかなか出ないような本質的な意見・疑問の提示があり、マスコミの取材(NHK、佐賀新聞)もあつて、充実した内容であったと感じています。

方法書骨子(素案)に対して5月に佐賀大学有明海総合研究プロジェクトが提出した意見書については、九州農政局から全ての項目について見解が示されました。我々が出した意見に対して、「考慮する」ある

いは「準備書において述べる・必要に応じて実施する」と答えられたものも多く、若干の不満は残りますが、多忙な中で真摯に検討いただいた農政局には感謝するところです。ただ、それでもなお残る疑問・意見や、方法書全体が公表されたことによって改めて明白になったいくつかの問題点があり、9月18日に提出し

た意見書では、それらについて11項目に絞って我々の意見を伝えました。環境アセスメントは、これから「環境影響評価の方法の決定」そして「実施（調査・予測・評価）」へと進みますが、こうした中で、できる限り我々の意見が取り入れられ、よりよい環境影響評価がなされるように希望しています。



## ■ 沿環連ジョイントシンポジウム 「有明海貧酸素水塊の実態と要因」の開催について

速水祐一（有明海総合研究プロジェクト 准教授）

去る10月31日に、佐賀大学工学部6号館大講義室において、有明海総合研究プロジェクトが開催機関となり、70人以上が参加して、沿岸環境関連学会連絡協議会第21回ジョイントシンポジウム「有明海貧酸素水塊の実態と要因」が開催された。沿環連主催の有明海に関するシンポジウム・ワークショップとしては7回目となる。シンポジウムでは、現在有明海の貧酸素水塊について活発に研究を行っている6人の研究者から、貧酸素水塊の形成・変動機構から生物への影響に至るまで、広汎にわたって最新の研究成果が紹介された。佐賀大からは、「海洋構造・物質輸送からみた有明海の貧酸素水塊形成機構」という題目で速水が話題提供した。その後、海洋学会海洋環境問題委員会の松川康夫氏から、有明海の貧酸素水塊形成機構について整理した結果が示され、続いて1時間半にわ

たって充実した総合討論がおこなわれた。2001年8月に日本自然保護協会による調査によって有明海で大規模な貧酸素水塊が形成されていることが報告されてから8年、現時点における研究の到達点と今後の課題を明確にすることができた意義あるシンポジウムであったと言えるだろう。



## ■ 中島教授 神田教授が「今日感テレビ」に出演

今日感ニュース:「肝臓病の方はご注意・夏に増殖“人食い菌”」

中島幹夫教授（医学部）と神田康三教授（農学部）が、2009年7月8日（水）RKB毎日放送の今日感テレビに出演されました。番組の今日感ニュースのコーナーで、人食い菌（ビブリオ・バルニフィカス）について、わかりやすく解説されました。ビブリオ・バルニフィカスの研究を行うプロジェクトチーム発足後、感染を判定する遺伝子検査の技術開発をすすめ、判定時間の大幅な短縮に成功し2時間程度で診断できるところまでできていること、また、従来の抗生物質の血管投与ではなく人食い菌を死滅させるウイルスを用いた新規治療法を開発中であること等についても説明されました。



## ■ 「佐賀大学の授業を受けてみよう」 体験講座開催

佐賀大学附属中学校の生徒が大学教授らの講義を受ける体験講座が、佐賀大学本庄キャンパスで行われました。有明海総合研究プロジェクトからは、9月19日に田端正明教授、10月24日に小林元太准教授が講義をされました。

同講座は11月28日にも開かれます。

### ■ 9月19日

田端正明教授（名誉教授）

講義テーマ「有明海のニゴリと干潟の科学的機能」

### ■ 10月24日

小林元太准教授（農学部）

講義テーマ「有明海における微生物研究～有用菌探索から感染症対策まで」

### ■ 11月28日

荒牧軍治教授（特任教授）

講義テーマ「有明海異変に科学はどこまで迫れたか」

## ■片野俊也研究員が日本陸水学会学会賞を受賞

平成21年9月14日～17日に、大分大学旦野原キャンパスにて開催された「日本陸水学会第74回大会」において片野俊也研究員が「第11回日本陸水学会学会賞吉村賞」を受賞されました。この賞では、日本陸水学雑誌、およびLimnology誌に掲載された学会員の論文の中から、毎年1～3名の受賞者が選ばれています。今回受賞対象となった論文は、「Abundance and pigment type composition of picocyanobacteria in Barguzin Bay, Lake Baikal」です。この論文は大きな淡水湖沼において、貧栄養水域での重要な植物プランクトンであるピコシアノバクテリアの動態に関して陸水学的に重要な知見を示したものであり、今後の研究の発展も期待できることが評価されました。



受賞論文: Abundance and pigment type composition of picocyanobacteria in Barguzin Bay, Lake Baikal Limnology (2008) 9:105-114

Katano, T., S. Nakano, O. Mitamura, H. Yoshida, H. Azumi, Y. Matsuura, Y. Tanaka, H. Maezono, Y. Satoh, T. Satoh, Y. Sugiyama, Y. Watanabe, T. Mimura, Y. Akagashi, H. Marchida, V. V. Drucker, I. Tikhonova, O. Belykh, V. A. Fialkov, M.-S. Han, S.-H. Kang, M. Sugiyama

## ■田端 正明先生が日本分析化学会功労賞を受賞

(社)日本分析化学会の主催により、平成21年9月24日～26日、北海道大学で開催された「日本分析化学会第58年会」の授賞式で、田端先生(佐賀大学名誉教授)が「2009年度日本分析化学会功労賞」を受賞されました。同賞は、日本分析化学会の正会員で日本分析化学会及び分析化学の発展に多大な貢献をなした研究者に贈られる賞です。

表彰業績: 「ポルフィリンを用いる超微量化学分析法の研究と学会への貢献」



「2009年度日本分析化学会功労賞」の賞記とメダル

## ■訃報

食水感染症研究部門長でありました(医学部麻酔・蘇生学教授)中島幹夫氏が2009年10月9日に御逝去されました。54歳。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。